

古代から近代までの日本で行われていた製鉄業はたたら製鉄。最も盛んに行われていたのは中国山地であり、特に出雲や石見でした。それはたたら製鉄に必要な砂鉄と木炭をこの地域が豊富に産出したからであり、多くの人々がたたら製鉄に関わって生計をたてていました。

石見西部では、現在の浜田市三隅町井野が砂鉄の一大生産地で、井野の砂鉄が各地のたたら場に送られ、鋳物用の銑鉄（炭素含有量が高い鉄。硬いが衝撃を受けると割れやすい）が生産されました。製品は大阪や広島、九州などに流通し、「石見銑」としてブランド化していました。

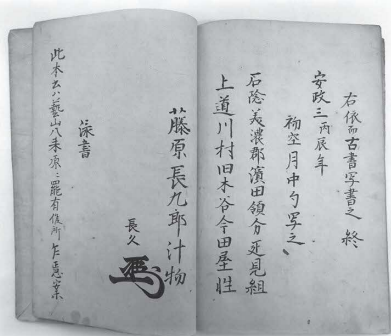
益田市域でも豊富な材木を活かして、たくさんなたたら場が設けられました。匹見町道川白木谷の本谷山たたら跡や美都町宇津川大鳥の大鳥たたら跡が市指定史跡になっています。

たたら製鉄に従事した人々が信仰したのが金屋子神です。金屋子神信仰は中国地方一円に広がっており、安来市広瀬町にその総本社とされる金屋子神社があります。金屋子神は女神とされ、犬、鳶、女性を嫌い、藤、蜜柑、

死体を好むといえます。

白木谷の津島家に伝わった金屋子神信仰に関する文化財が「津島家金屋子文書」です。和綴の本1冊で、表紙には「金屋子神秘録 全」とあります（正確には「金屋」は金偏に「屋」）。内容は金屋子神の由緒や祭文等、多岐にわたります。奥書によると、安政3（1856）年に浜田藩領定見組上道川村白木谷の藤原長久（屋号今田屋）が写したものを、「石ハマ」の住人青木義盤が写したとあります。

独特の内容を持つことから、同様の金屋子神信仰を伝える文書を比較することで、この地域の信仰の特徴を明らかにできると期待されています。



津島家金屋子文書の奥書の、
藤原長久が写したと記されている部分